

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第303回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は宮崎大学が実施したプログラムと、さくらサイエンスプログラムの同窓会組織である、さくらサイエンスクラブ(SC)のマレーシア同窓会について報告する。

宮崎大学の活動報告



森下 和広
(宮崎大学
フロンティア科学
総合研究センター
特別教授)

ペルーと日本

若手研究者の交流と共同研究

宮崎大学はさくらサイエンスプログラムの支援を受け、国立サンマルコス大学とのオンライン交流を実施した。国立サンマルコス大学とは、教員同士の繋がりが深く、大学間協定も締結している。開会式では両大学長、研究担当副学長、国際連携担当副学長、さらにはペルー駐節日本国特命全権大使にもご出席いただき、ご挨拶いただいた。双方ともに、今後の研究交流に前向きで、これを機会に人的交流が活発になることを願って、今年度のオンライン交流会を進めることになった。

1回目・2021年11月28日

地域資源創成学部学生とサンマルコス大学医学部学生が、互いの国や文化、大学、そして研究内容等の紹介を行った。ディスカッションなどは行われなかったが、今後の交流の手始めとなる交流会となった。

2回目・2022年1月18日

医学部産婦人科とサンマルコス大学医学部産婦人科および小児科との間で、両国におけ



産婦人科・小児科との交流会。後列左から2人目は著者(森下氏)、後列右から2人目は池ノ上前宮崎大学長

る新生児医療ならびに新生児死亡についての紹介や解説、宮崎県における新生児医療における臨床面ならびに基礎研究面において交流を行う上で最初の発表会となった。また、サンマルコス大学からの大学院生受入についての紹介も行った。

3回目・2022年1月28日

双方の医学部外科学講座に加え、交流のあるボリビア国の外科医師にも参加していただき、医学部間での胆嚢癌プロジェクトとして、ペルーにおける胆嚢癌の診断や治療法の紹介、胆嚢癌手術の適応の最適化についての発表を行った。それぞれの国における胆嚢癌の基礎臨床面における問題点から、今後の共同研究や交流を深めることで意見が一致した。なお本学では医学獣医学総合研究科大学院特別ゼミナールとしても開催し、60名近い博士課程ならびに修士課程の学生も参加した。

4回目・2022年2月28日

本学で医学英語講座を受講している医学科生とサンマルコス大学の医学科生、4~6年生が各20名程参加し、交流会を実施した。国や大学の紹介等につき続き、コロナ禍におけ

る医学教育や実習に関して気づいた事を挙げ、その長所・短所を紹介し、今後の医学教育のあり方、方法について双方の取り組みを発表した。後半は、4、5人のグループに分かれ、それぞれのトピックについて討論した。両校の医学部長(または代理)も出席し、医学部間での国際交流や人事交流、医学研修や研究協力など、今後の発展を検討していくことと

なった。これらの交流会により、学部学生同士の交流や医学部内での臨床ならびに研究トピックについて、基礎および臨床医学研究者や医師による発表を行うことができた。これを契機とし、今後のさらなる情報交換や相互訪問を重ね、共同研究の推進、人事交流を進める手がかりとしたい。

さくらサイエンスプログラム

マレーシア同窓会第2回会合、ウェビナーで開催

科学技術振興機構(JST)

科学技術振興機構とマレーシア同窓会の共催で、2月26日に「Bridging Social Capital and Cultivating Excellence」ウェビナーが102名の参加者により、オンラインで開催された。写真は、マレーシア同窓会が2019年10月に設立された後、最初の同窓会会合となるものでDr.Nor Ruwaida Jamianが司会を務めた。

● 開会

冒頭、マレーシア同窓会代表とJSTの岸輝雄さくらサイエンスプログラム推進本部長からの挨拶に続き、高橋克彦駐マレーシア特命全権大使、Nor Azam臨時大使、古屋圭司衆議院議員・マレーシア友好議員連盟会長から、SSPと同窓会(MASSA)への期待を込めて激励の挨拶があった。高橋克彦大使からは、マレーシア・日本は古くから良好な関係を築いてきており、SSPはマレーシアとの交流・発展に貢献しマレーシアの若い方々に日本訪問の経験を提供してきており、今後SSPが科学技術分野で二国間の交流の拡大に貢献し、さらに多くのマレーシアの若手を日本へ招へいしてほしい旨が述べられた。Nor Azam臨時大使からは、2022年はマ



レーシア・日本の外交関係開設65周年、さらには東洋政策(Look East Policy)40周年を迎える記念の年であり、今後、SSPにより、両国の交流、教育の更なる発展を期待していると述べられた。古屋圭司衆議院議員・マレーシア友好議員連盟会長からは、日本・マレーシアの友好関係や交流が更に発

展し、マレーシアの若手が日本で勉強できるように尽力していくとともに多くの若手が来日することを期待しているとの発言があった。

● 基調講演

まずMoi Meng Ling教授が登場。Moi Meng Ling教授は、自身の留学生時代、卒業後の東南アジアにおける熱帯伝染病研究から近年のCOVID研究を通して、関係者との国境を越えた連携の重要性を強調した。

次にUniversiti Teknologi MalaysiaのDr. Zamri Yusopが登場した。名工大在籍時の留学生としての体験談やSSPセミナー参加時における体験談に加え、同窓会における活動について紹介した。また、日本への留学方法について自身の考えを提示するとともに具体的な方法について情報提供を行った。

● 同窓生からの発表

Ganxinは、1982年から開始したLook East Policyに基づくネットワーク構築の重要性を指摘。また、現状、コロナ禍での科学の生産性の低下も懸念されていることから、今回のSSPの活動のようなオンラインによるネットワークの構築、維持のための活動の継続が必要である旨、語った。

Cheyanは、自身の名工大への留学時代および2021年1月に、SSP主催タイ・マレーシア・台湾と合同(九工大サポート)でのウェビナーに参加した際の経験談を参加した学生のコメントとともに紹介した。

また、日本学生支援機構(JASSO)マレーシア事務所のMr. Raymond TanやPLIマレーシア元留日学生協会(JAGAM)のDr. Lau Wee Yengが、日本への留学について申請方法等豊富なデータをもとに有益な情報提供を行った。

最後に、JSTの黒木慎一さくらサイエンスプログラム推進本部長より、さくらサイエンスクラブ(SSC)がさらに活発に活動できるように今後も支援していくとの挨拶が述べられ会を締めくくった。